

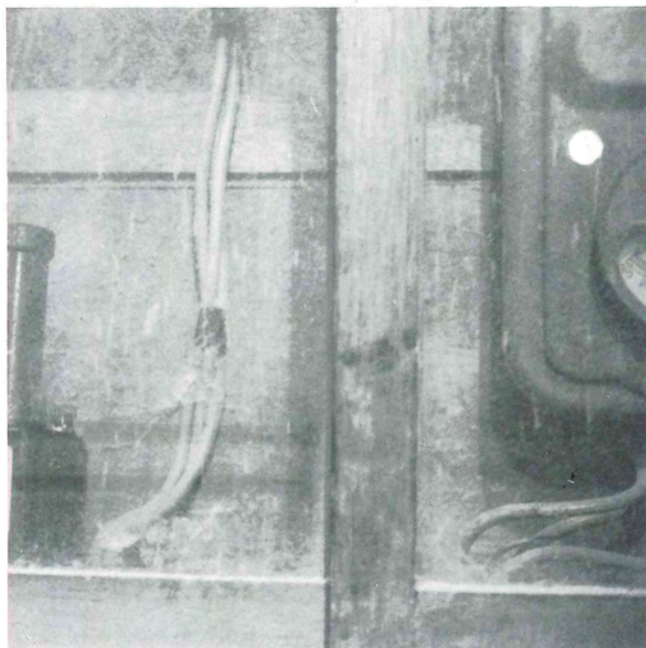
ARCHITECT

Japan Institute of Architects

1989

9

—SEP



C O N T E N T S

- 永遠をめざすもの・生命あるもの 水谷研治氏に聞く
- 創造の源を探る長い手紙 久野 真インタビュー
- 職業としての建築① 瀬口 哲夫
社会と施主をつなぐ中間者としての建築家の役割
- J I A に期待するバラ色でない未来像 林 英光
- 21世紀の都市デザイン 都市デザインセミナー

No. 12

ARCHITECT
89 — 9 ■ SEP

CONTENTS

目次

Essay

会員ずいひつ・石 ————— 西井 信幸・加藤 幹彦・深見 昌史・吉川 栄男 ————— 2

Interview

永遠をめざすもの・生命あるもの ————— 5
水谷研治氏（東海銀行常務取締役調査部長）に聞く

Suggestion

都市への提言
コミュニティーの中核は小学校 ————— 日比 龍美 ————— 21

それは レジデントとトランジェントの接点

History

職業としての建築①
社会と施主をつなぐ中間者としての建築家の役割
————— 瀬口 哲夫 ————— 12

Urban design

J I Aに期待するバラ色でない未来像 ————— 林 英光 ————— 14

社団法人日本建築構造技術者協会へ改組して ————— 渡辺 誠 ————— 20

創造の源を探る長い手紙 ————— 久野 真インタビュー ————— 16

21世紀の都市デザイン ————— 都市デザインセミナー ————— 10

Urban Identity ————— 都市デザインシンポジウム ————— 22

News

賛助会員の製品紹介 ————— 松下電器産業(株) INAX ————— 23

Book

新刊案内 ————— 22

表紙デザイン カミムラシヨウサク (E. D. LABO)
カット 神谷義夫

会員ずいひつ

石

石の永遠性と可能性

西井 信幸

木の文化にある我々日本人が、建築の中に石という素材を身近に感じるのはどんな時だろうかと思う。重厚で圧倒的なその存在感は、日本人には馴れずヨーロッパの文化といった風情もある。

近代建築においては、工業化を背景として鉄とガラスとコンクリートという材料が全世界に浸透したが、石という材料はむしろ伝統様式の素材として排除されてきた。

近代建築の巨匠ール・コルビジエやミースーの建築作品の中に石を主題としたものは皆無であり、唯一例外としてライトの帝国ホテルや落水荘の中に大谷石や岩石といった素材が見られる程度である。

改めて、「石という素材を用いた建築物で、あなたのいままでの現実の空間体験の中から最も感銘を受けたものを3つ挙げなさい。」と言われると、私は第1にインドのエローラ・アジェンタの石窟、第2にギリシャのパルテノン神殿、第3にイタリアのサンピエトロ大寺を挙げる。(私がもしピラミッドを見ていたらそれも加わるかもしれない。)

これら3つの建造物は、そのスケールと時間を歴史に刻印したものであり、石という素材にかかわらず、私の感銘を受けた空間であるとも言つてよい。

第1のエローラ・アジェンタの石窟は、石の造形としては、ネガティブに巨大な岩山を神の名のもとに何百年も彫り込んだ寺院であった。壁に彫られたヒンズーの神々は、夕刻の光に映し出されて何千

年もの力を持って迫ってくる。この建造物は、ピラミッドと同じく数千年を経てもなお存在するものであり、永遠性を主題として元来の自然の中の安定した石の素材の使われ方である。

第2のパルテノン神殿は、地中海の底知れぬ紺碧の海と光の中で、コルビジエのいう「美しさの根源と機械」であった。このパルテノン神殿は、石の造形や文化でいうとギリシャ・ローマの時代に当たる。それは、エジプトなどの石の関わり方とは全く異なり、本来「木」であった形態をより耐久的な「石」の材料に代えたものであり、水平・垂直の「積木式」の構造が、ローマではアーチ、ドーム、ヴォールトといった斜めの荷重に抗した構造に発展していく。

石を壁のように積むという素材のあり方は、必然的に内部を暗くし、人間の思考を深め、それ以後のヨーロッパの文化・社会・思想の根元になっていくという空間構成でもあった。

第3のサンピエトロ大寺は、ミケランジェロらによるイタリア・ルネサンス〜

ゴシックの傑出した建物であるが、中に入らず天井の高さに驚かされた。それは、この建物があの純重な石でできているのが不思議なほどの聖なる空間であった。それは、ゴシックにおいて石を内部からでなく外部で、飛梁や側壁で高い所の石の荷重を支えるといった、ギリシャ以来初めて石を超越して完全に人間の思考が優先し、石という重い材料を屈伏させた素材の昇華の極限でもあった。

これらの石を素材とした3つの巨大な建造物は、現代では時間と経済的理由とその目的性により実現するのがほとんど不可能であるといつてよいであろう。

(ただ例外として、ナチス・ドイツの象徴としてA・シュベアーらによるベルリン大改造計画の中で高さ230mの石造大ドームを建造しかかったことがある程度である。)

近代建築は、その素材の耐久性の寿命として100年を1つのメドとしているが、石はむしろ人間の永久性を願望する材料であろう。

もっとも現代では、歴史の遺産という

石造建築のスケールの巨大性よりも、石の持つ永遠性という素材のあり方をテーマとすべきである。

近年、石という素材をその理念からでなく、むしろ本能としてとらえた、ルイス・カーンやカルロ・スカルパ、白井晟一の建築空間の中には、その永遠性の表現のあり方の可能性を見る思いがする。(楠西井都市建築設計事務所代表)

1972年の旅

加藤 幹彦

私にとって最も長く、印象深い旅、それが17年前の欧州への旅であった。今思えば呆れるばかりに準備不足の中、横浜から船で飛び出すように出発したのが昨日のようである。ドラの音は当ての無い未知の土地への旅立ちにはあまりにも強烈であった。ナホトカ、ハバロフスク、モスクワを経てストックホルムの空港に降り立った瞬間から、不安と期待が交錯する中、コンダクターのいない気ままな旅が始まった。

旅にはさまざまな出会いが生じ、貴重な教えを受けることが多い。私は自分の目と肌でヨーロッパの建築を体験し「何か」を感じようとしていた。「何か」を求めていた。目的地の一つであったヘルシンキでのこと。ここには建築図書館があってフィンランドの代表的建築の資料がパネルファイルされている。建築図書館といつても知る人は余りなく建物は木造の古い2階建てであった。入口に入って2階に上がるとそこには一人の先客が居合わせた。アメリカからの女子留学生であった。話すうちに彼女はタイバラハ

ティ教会へ行くといいという。私は予定を変更して行ってみることにした。1960年のコンペ作品で、スオマリネン兄弟によるこの教会は、私にとって今でも心に残る感動的な建築空間の一つであった。それはヘルシンキのほぼ中央に位置したテンペリアオキ広場にあり、周囲をアパート群に囲まれた高さ約8~13mの岩山であった。建物らしきものは見当たらないのである。川に挟まれた漁業の町で育った私には、町の真中に玄武岩が隆起したような巨大なごつごつしたはげ山を目の当たりにするのも初めてであった。その岩山を一周するとコンクリート打放しのゲートと壁面が顔を出している。周囲の住人にとって貴重な広場であったために広場の環境保全を目的とした岩山の自然保存を考えた結果だという。いわば岩穴的なこの教会は打放しのトンネル状アプローチを経てドーム屋根をすっぽりと冠した岩壁の礼拝ホールへと入る。所々に水がしみ出る自然のままの岩肌にはドリルの後も残り、それがそのまま礼拝ホールの壁となっている。天井ドームは中央部に銅板をコイル状にした円板と外周部に放射状のフレームがルーバーのごときトップライトを持つ。岩壁には壁周囲を取り巻くトップライトから光が落ち込み独特の雰囲気をかもし出しみごとな自然との調和を折り成している。当然、暖房設備はあるものの夏冷、冬暖であるという。「建築—その真の姿は、人がその中に立った時にはじめて理解されるものである」—アルヴァ・アアルト—

(加藤幹彦建築設計室主宰)



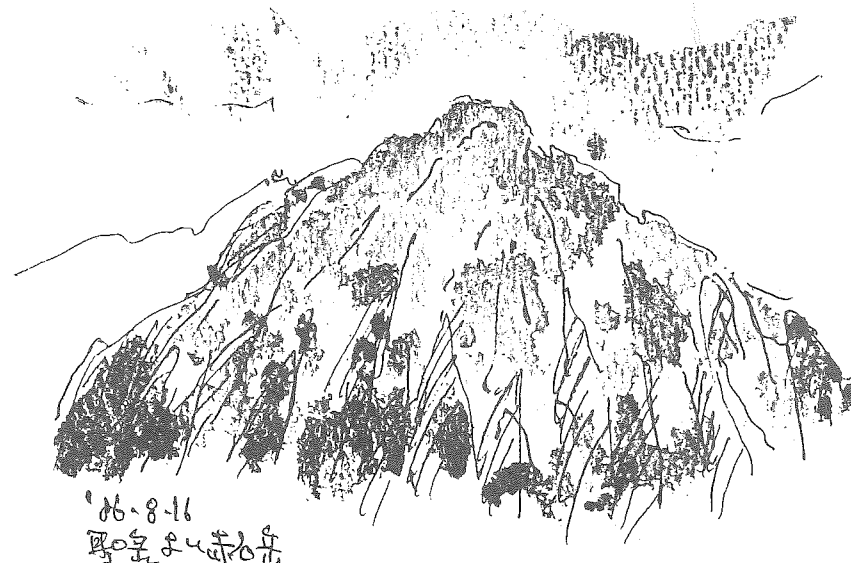
『石』

深見 昌史

何の遊び道具のない時にも楽しめた石蹴り、いつ行っても怖い思いをしていたお墓、家の手伝いをして壊した石臼、母に頼まれ川原から拾ってきた漬物石、夏休みの宿題に集めた標本箱の石、路面電車の大量の敷石、歴史をそのまま残すお城の石垣、何段も何段も数えながら登った神社の石段。

なぜか石には思いが込められる。

建築を始めるようになって、最初に高価な石を使ったのは、ポーチの石段と受付のカウンターである。そんな頃、竣工したばかりの大名古屋ビルヂングのエレベーターホールの、見事な大理石の壁を見て、デザインよりもその金の掛け方が凄いなと感心をした。また同じ頃、日銀名古屋支店を見て、石を使っても大した建築にはならないと思った。とにかく



永遠をめざすもの・生命あるもの



水谷研治さんは、全国で注目されているエコノミストであり、優れた経済学者である。

水谷研治さんをトップとする東海銀行調査部は、東京集中による弊害を警鐘して遷都論を全国に巻き起こした。さきには円高120円を予見し、その先見性にひとびとは驚いた。

水谷さんからは、いま建築をどのように観ているか、ゆっくり落ち着いた口調で示唆に富んだ話をうかがうことができた。

東海銀行常務取締役調査部長 水谷研治氏に聞く

インタビュアー 鋤納忠治

と障子でできた二坪の建築（註 茶室）。あれも建築。これも建築。永遠の建築にうたかたの建築。ずいぶん幅があるように思います。しかし、いずれにも共通しているのは自然からひき出されていることだと思います。自然のものすごさ、動かざること大地の如く、それぐらい自然とともに永遠のものをつくりたいという欲望、自然というものは動いているわけですから、その間のひととき、利用できるものは利用しよう人間は考えるわけです。それにしても自然から来ているものはものすごく大きい。そんなことを時々思うのです。古代からの永遠なものいいし、日本的なものいい。そして奇抜な建物も、それはそれで素晴らしいし、機能的なものもいい。しかし、建物は楽しめるものであると同時にやはり使われるものでなければならぬと痛切に思っています。使い勝手というか、それがあってのデザインだと思います。デザインのためのデザインというのは別の芸術であって、建築も芸術品としての建築もあるでしょうけれど、やはり使うという面が重要じゃないかと思えます。ものを作る場合、どれくらいの時間を考えて作るのでしょうか。永遠を考えてつくるのがいちばんいいでしょうけれど現実の建

物をみた場合、それほど永遠ではありませんし、とくに日本の建物は30年ともたないものが多いのではないのでしょうか。あるいは30年の間にどんどん改造しないと使えない。それには使っている人が変わっていくから、それにあわせて改造しなければいけないということもあるでしょう。使うわれわれが変わっていくからやむを得ないということがあると思います。そうしますと、その時点における効率というのを考えてみるとどうか。実はそんなものじゃなくて将来には住む人も何もかもまったく違ってくるのだと、だからその時に使う人にとって最高のものをつくれれば、それでいいのか、ということ、そうじゃないのだ、あとあとのことを考えてつくらなければいけない。そのためにはどうしたらいいのか、ガランドウのものをつくれれば、あとから使う人はいかようにも使うことができるのではないか、という考えがあります。その時々にはしか使えないものはよくないのではないかという考えです。そういう考えがある。それから耐用年数ということですが、どれくらいの期間使えるかということ。これは物理的な意味と経済的意味があります。いま問題となっていることに、公共施設はいったいどれくらいの期間使

●永遠の建築うたかたの建築

——水谷先生には、エコノミストとして、建築を経済的な側面から、どのように捉えておられるか、お話をうかがいたいと思います。われわれは、建築を美的行為、デザインとしてとらえ、多くの建築家は建築を経済行為としてとらえる認識が乏しい面があります。建築は美的芸術的行為であると同時に、現代では経済行為としての側面を非常に大きなウェイトで持っていると思うわけですが、そうしたところからお話をお願いしたいと思います。

水谷 私はさいわいのことに海外、あちこち回ってきましてね、いろんな都市、建築を参考にしているのですよ。古いところではピラミッド、あるいはギリシャのパルテノン、ローマのコロシウム、あるいはメキシコ、インカの建造物。新しいところではシカゴのビルディングなど奇抜なものが多いですね。だから多くのものを雑駁とみているのですよ。そこで日本の建築と、こういう古い建築とはずいぶん違うと思います。「今に残っているギリシャの建築」と「今に消えてしまいう建築」、デザイン博に出ています

カット 神谷義夫

ての神殿を見るより、どんな人々によって、いかにしてこの聖なるかたちが創出され、そして築造されてきたのだろうかということに想いは移ってゆく。

まるで牛のごとくムチで打たれながら石を運びつづけ、そして、朝から晩まで黙々と石斧やのみをふるって石を刻みつける人々、そうした家畜同様に扱われている奴隷の悲惨な姿を頭に思い浮かべそうになる。

しかし、目の前にある静まりかえった神殿の石に刻み込まれた文様や装飾にそっと手を触れてみると、たしかに自分の手のひらを伝わってくる鼓動が聞こえてくる。

そうした中には、強制されて労働をさせられている奴隷たちのイメージはどうしても結びつかない。

謎めいて錯綜する線と線のからみ合い。幾度となく反復する想像的形象パターン、壁面を梁をそして柱をびっしりとそうした文様と装飾で覆ったであろうと当時の神殿の姿を写してみると、それらのかたちを創造し、かたちづくってきた人々の心情の無気味なまでの執念とおどろおどろしさに次第に圧倒されて、息苦しくなってくる。

おそらく生きることしか認められなかったであろう石工たちが、自らが生きたという証しを石への一振一振に残したいという情念が何千年も経た今もまだ、石の中に流れつづけているのだろうか。

しかし、認められるあらゆる自由が与えられ、高度な技術と豊富な素材が選択できる現在の我々が、彼らの情念の一振一振にまさる思いを建築に託すことができるだろうか。 (柳C&C設計主宰)

知る巨匠たちの作品が展示してある。その美術館の真正面とギャラリーからみる中庭のデザインはすばらしい。その位置から視覚に入るすべてに使用された花崗岩の彫の深い肌合、色、大きさ、目地、それから醸し出される雰囲気は石なればこそそのものである。人工のきらびやかさで溢れる物の中で生活する者にとって、自然のままの石を素直に表現したデザインの壁は心から落ち着いた気持ちにさせてくれる。しかし、もう少しの予算があれば建物すべての外壁に石が使用できたし、そうでなければ吹付タイルだけは止めて、せめて打放しコンクリートで仕上げたかった。そうすればこの建物は本物の建築に成り得た。ヨーロッパの石造建築はまだ一度もみてはいないが、それにしても石は冷たくて、暖かで、歴史そのもので実にすばらしい。

(柳三輪設計事務所)

石に刻み込まれた情念

吉川 栄男

廃虚と化した神殿の前に立たずみ、ものの形が創造されゆく過程を思い起こしてみることは、過ぎ去った時への旅をするとき、最も興味深いことの一つである。

歴史は、太古の宮廷建築、宗教建築のすべてが強力な統一権力とそれを支える巨万の富によってつくられてきたと教える。

そして巨大な神殿や祭祀場をつくらせた権力者である王であり女王の名を記述する。

しかし、それらの遺跡に立ち、累々たる石の廃虚を目の前にし往時に想いを馳せるとき、当時の権力者の力の象徴とし

石は高価な物である。建材としては最高の物の一つであるには違いないが、自分が係わる仕事には縁の薄い材料と思いつきそれが今に至っている。どうしても石でなければならないと思って設計をしてみても、終わってみればそれがタイルにコンクリートになっていた。

いろいろな新建築に興味を持って見学をしたのも、ほとんど打放しコンクリートとタイル張りの建築ばかりでせいぜい床を石張りにしている程度である。そのような中でライトの帝国ホテル（大谷石）とその隣の村野藤吾の日生ビル（ミカゲ石）を観た時は、それまでとはまた全く違った感動を覚えた。日生ビルには厳格な気品とその重厚な風格に本物の建築を知り、帝国ホテルは正にライトの言う人間性豊かな有機的建築の神髄をみた。そしてもう一つ白井晟一の親和銀行（ミカゲ石のミガキ）の厳しいまでの緻密さを持って建築を哲学として表現したものの。

しかし、最近私の感性が衰えたのか、ファッションデザインの建物が目立つばかりで心引かれる建築になかなか巡り合わない。

それにしても石が多く使用されるようになった。小さな街角のビルでもエントランス・ホールは豪華な石張りであるし、ブティックや喫茶店でも磨いたり、叩いたりの石がピッカピカの金属とその存在を競っている。建築を構成する素材の中でも、石、土（やきもの）、木と鉄、硝子、コンクリートは六大要素であり、特に前者のそれに優るものはない。

私の家の近くに、メナード美術館（東急建設の設計・施工）がある。マチス、ゴッホ、横山大観、平山郁夫など誰もが

えるだろうということがあります。かなり犠牲を払ってつくられているわけです。永遠のものをつくろうとしますからね。ところが現実には32年です。それが公共建築の耐用年数です。

●補修に費用がかかる

—何かのデータですか。

水谷 経済企画庁の調査によるものです。32年という短いですね。100年は使えるだろうと思っていたわけです。とくに日本は最近はこのように技術があるのだから、200年は使えるだろうと考えていた。ところが現実には平均して32年といわれると、ずいぶん違うなあと思うわけです。永遠に使えるなら、かなりの労力とお金を投じて大丈夫だ。32年程度であるならば、それ相応にしておかなければならないということになります。

ジョージ・ワシントン・ブリッジというのがあります。あれは将来、交通量が増えたら2階建てで使えるように強度設計されているそうです。ジョージ・ワシントン・ブリッジは1931年の建設ですから、50数年になります。当時、自動車もそんなに走っていない。その時代に将来を予測して作る偉大さ、スケールの大きさというのは日本人はとうてい及ばない。そう思いました。私も32年しか寿命のないものをつくるのですから、考え方の違いもあると思います。やがて、時とともに移ろいて朽ちはててしまうという考え方があっても知れませんが、それにしてもスケールの大きさというのは全然問題になりません。

これも従来は仕方がなかったかも知れませんが。お金の問題もありましたからね。技術もあつたでしょう。しかし、われわれは2つを分けて考えなければいけないのではないかと。木と紙でつくったものと、もっとも基本的な重要な、将来にわたってずっと使っていけるものをつくっていくという2つの考え方がなければいけないと思うのです。それが建築にあてはまるかどうかわかりませんが、いろん

なものを見ていると、そんな感じを私は今もっているのです。ですから、私たちの考えを変えていかなければいけないと思うのです。最近のものをみているとずいぶん変わってきたなとは思っています。日本も現在のような経済大国になりますと、アメリカ的なスケールで、いや、それ以上のスケールでやってもちっともおかしくない。その時、考えなければならぬのはいったんつくったものはどうなるかということなんです。

—建築とか橋とか、西洋との考え方の差はすべての面にあるのではないのでしょうか。建築の世界ではいまライフサイクル・コストिंगということが言われています。たとえば建築の寿命が60年ですと、その60年にかかる補修・メンテナンスすべてを含めて100%としますと、建設時におけるインシヤルコストは16~7%だということが数字的に出てくるわけです。全体の6分の1ぐらいのわけなんです。

水谷 素人は100%と思わなくとも8割ぐらいだと思っていますね。

—したがってインシヤルコストを節約してもランニングコストがかかる建物はよくないわけですね。インシヤルコストはかかるけれど、ランニングコストはかからない、しかも資産価値の高いものをつくっていくということが、最近、ここ10年くらい前から建築のクライアントにできてきて建築に対する考え方が変わってきています。高度成長時代の設備投資は機械を入れる器のためでしたし、オフィスビルは人間が働くための器でした。そういう考え方が最近は変わってきました。

水谷 それはびっくりですね。16%というのは。

—それは、物価の上昇は計算に入れず建物のできた時点の数値であるわけです。

水谷 建築でメンテナンスというと、ど

ういったものがあるのですか。

—いちばん大きいのが電気代といえますか、冷暖房費です。ですから窓を南側につけるといいと皆さん思ってみえるんですけど、ビルの場合は、南側に窓が多いと冷房費がかかってメンテナンス費用がかさみます。

水谷 じゃ窓を小さくして、2重窓にしてはどうでしょう。

—工場などでは無窓工場というのがよくあります。

水谷 窓ふきなんて大変でしょう。私は前にニューヨーク支店長をやっていた、これはワールド・トレード・センタービルの87階なんです。ですからいつもお客さんが来ますと、「先の先まで見通しがきいていいでしょう。」なんて皮肉をいわれましてね。「いや、見通しがきかなくて困っているんですよ。」(笑)なんていってました。

●「究極の設計」

水谷 ワールド・トレード・センタービルで思い出しますのは、1階から5階ぐらい吹き抜けになっていたことです。だから1階から5階までエレベーターも何もないわけです。最初に行ったときには、もったいない、と思いましたね。あれは、ヤマザキさんの設計でしたっけ。

—ミノル・ヤマザキの代表作です。

たしか110階あります。

水谷 高さ400mでしたっけ。ああいうところにいますと、人間のスケールが少し変わってくるような気がしますね。日本人もああいう大きなところに住むと、性格が建物と共に変わっていくのではないかと思いましたね。

—ああいうのも、何年使えると考えているのか知りませんが、日本では税制ってというのは、考え方に与える影響が大きいと思うんです。たとえば鉄筋コンクリートでつくる場合、クライアントが「税法的には50年か55年で償却だ」というと、そのように考えて設計しなさい、ということ

になります。それを百年ももつように設計しなさい、という話にはならないと思うんです。

最近はやりの土地信託、あれなんかも30年で元の地主に戻す。その間に、経済行為としてペイするようにしようと。

そういうものは、知らず知らずのうちに、設計に大きなウェイトで入ってくると思っています。ですから、いまのジョージ・ワシントン・ブリッジみたいな考え方で、家をつくろうというクライアントは少ないでしょうね。

水谷 そうでしょうね。家族がふえたら3階建てにして3所帯住もう、ということから基礎からやっていけ、などということとはあまりありませんね。



左 水谷研治氏・右 鋤納忠治

—そのへんはやっぱり、経済行為としての建築は、設計する立場でも、クライアントにどういうお考えがあるかということでも随分違うわけですね。

水谷 そうしますと、クライアントの意向をそのまま尊重するのではなくて、「実はこういうことが必要です。」というようなことは当然アドバイスされるわけですね。

—当然申し上げます。いまのライフサイクル・コストिंगなどという話でも、いかにメンテナンスの費用を下げるかですね。メンテナンス・フリーの素材もありますが、そうするとインシヤルコストが高くなるでしょう。

非常に卑近な例でいきますと、いま分譲マンションというのは、本当の経済行為としての競争が激しくて、い

かに建築のコストを安くつくるかということになってますね。そうしますと、私の言い方ですと「究極の設計」がしてある、というんです。リミット・デザインといいますかね、それ以下にはしようがない、というものです。構造、仕上げその他、基準スレスレのところでも上手な設計をしましてね、コストを下げたって売れ出すわけです。もうこれ以上安い家はできない、という究極まで設計がされているという過言ではないと思います。

水谷 そうですか。マンションが雨漏りしたりした場合に、修理が難しく、という問題がでてますね。

ニューヨークなんか、50年、60年たったアパートで、本当に使えるものがあり

ますね。日本ではそのへん、どうなんでしょうか。そんなに長くは使えないものなんじゃないか、という意見がありますね。建築関係でもそういうことはたくさんあるんじゃないですか。不必要な規制が多すぎる、と。お立場上いかがでしょう。—不必要か不必要でないかという判定の基準はたいへん難しいんです。たとえば構造基準法ですね、100年に1回起きる地震を基準に考えるか10年に1回くらいのを基準にするかで違ってきますでしょ。

消防設備なども、例えば後楽園ドームのように人が大勢いるときだけしか使わない建物には、「これは不必要ではないか」と思われるものがたくさんあります。

水谷 いま日本中で問題になっていることの一つですけれどね。もう少し自由にしてもいいんじゃないか、と。それを、われわれが何か起こったときに、政府の基準が甘かったんじゃないか、なんていうからいけないんですね。

—もっと自分たちで責任を持たなければならぬと思います。

水谷 最近特にそうですね。何かことが起こると、すぐ政府に不満を持っていく。

水谷 いま日本中で問題になっていることの一つですけれどね。もう少し自由にしてもいいんじゃないか、と。それを、われわれが何か起こったときに、政府の基準が甘かったんじゃないか、なんていうからいけないんですね。

—もって自分たちで責任を持たなければならぬと思います。

水谷 最近特にそうですね。何かことが起こると、すぐ政府に不満を持っていく。

—もって自分たちで責任を持たなければならぬと思います。

水谷 最近特にそうですね。何かことが起こると、すぐ政府に不満を持っていく。

—もって自分たちで責任を持たなければならぬと思います。

水谷 最近特にそうですね。何かことが起こると、すぐ政府に不満を持っていく。

——しかし、お上が責任を持つということはないんですね。

水谷 持てませんからね。持つっていうのは規制を厳しくするっていうことでしょうか。ガードすることばかり考えて、何かあるたびに規制をきつくしていくと、コストも上がりますし、相当なマイナスなんでしょうけれど。実際にはかなり技術も発達してますから、安全性の面では大丈夫なことが多いと思いますがね。そういうことを考えますと、私ども、使う方の問題になりますね、これは。

——建築の場合でも事故が起こるたびに規制が厳しくなりましたね。

水谷 でしょうね。しかし、みなさんの方からも声をあげて、いくらなんでもひどすぎると、これらが全部誰の負担になるか——結局クライアントの負担になるわけですけど——、もう馬鹿馬鹿しいよ、と、いってもらいたいと思います。

——私ども設計をする立場でクライアントに、「これはこうしないと法律は通りませんよ。」と申し上げましたら、「お前たちはいったい役所の回し者か」といわれました。(笑)

水谷 でも事実通らなきゃ仕方ありませんものね。それが妥当なものであればいいんですけどね。

——それぞれのジャンルで、法規制と自由化といいますか、自分が専任を持つか持たないか、ということのギャップは随分あると思いますね。

水谷 一般的に申しますと、大きな波として、自由化の波がありますでしょ。むかしは本当に規制されていたんです。産業界すべてが。たとえば、鉄鋼などはなくてはならない品物ですから、鉄鋼を買う、売る、すべて規制していた。いまはそんな必要はなくなった。なぜかという、変なものを生み出すと最終的にちゃんと経済的しっぺ返しを受けるから、そう心配いらぬ、ということなんです。

変な建築設計をしたら、結局その設計屋さんはずぶれてしまう、だからそう心配いらぬんだと、そういうことがある

んでしょね。ですから、全部自由化になっていったわけですよ。本当に、そこまでやっていいの、と思うぐらい自由化がどんどん進められてましてね。

建築では、なかなか外国のものが出てくるということはないんでしょう。そうでもありませんか。

——結局、大きいものは、日本の法規制をクリアするのがたいへんですからね。

水谷 たとえば中部新国際空港、ああいうものの建築といえば、正直いって向こうの方が進んでいますよね。たくさん数つくってますから。彼らの基準からいえば、これは必要ないとか、いろんなことがあります。日本の基準とは随分違うんでしょうね、きっと。日本の規制でも決していいとは限らない部分があるはずですよ。

●自由化のすすむ設計界

——設計の世界は、わりあい自由化されておまして、日本の建築家が海外へ行って設計をしていますし、最近では外国の設計者が日本へ入ってきて非常に仕事をしたがっています。日本は経済大国になりましたのでね。

水谷 コンペの賞品もいいんですかね。——こんどの関西空港も、レンゾ・ピアノという人が設計者に選ばれました。また、有名な香港上海銀行の設計者も、東京でいま仕事をやってますしね。

水谷 あれは奇抜な建物ですね。

——たとえば、中国人で、現在はアメリカ人であるアイ・エム・ベイさんが、パリのルーブル美術館の改造の設計をやっているとかですね。非常に自由に国際的になってきています。

水谷 それは結構な話ですね。設計の場合にいろんなアイデアを持ってこなければなりませんでしょう。そういうのはどこから引っぱってくるんですか、皆さん。何かアイデアの元になるようなもの

があるんでしょうか。非常に奇抜な建築があちこちにありますけれど。

——これは、いわゆる単純なもの、たとえば鳥とか船を直接アイデアにとり込む、ということでは成功していません。もう少し技術的に納得できるところでのアイデアでないかと。

水谷 建物は使う、という目的が大きいと思うんですよ。当初、目指すものがあってつくるんですが、しばらくすると使い勝手が悪くなっていく、ということがかなりありますね。

さっきも話に出た飛行場の建物でも、つくったときはそれなりなんですけど、使っているとそれも使い勝手がよくない。ホテルなんかでもありました。建物そのものとしてはよさそうなんですけど、泊まる、あるいは利用する人にとって実に不便というのが。こうなってくると、建築屋さんのための建築、設計屋さんのための建築であって、使用者はとんでっちゃってるという気がしますね。使用者の立場に立てばもっともっと機能的なものがあるはずだと思います。そういうのはどう考えたらいいんでしょう。まあ、慣れるよりしょうがないんでしょうけど、使用者の方が。

シカゴでもそんな例がありましたね。空港の近くのホテルで。どうしても私どもは、行きますと、使用者として見ますからね。建物をデザインとして評価するよりも、機能本位で考えてしまいますね。デザインと機能ということですが、工場なんていうのは、非常に機能が必要であるし、実際に見ましても、素晴らしい感覚だな、と思うのがありますね。

ああいう大きなスケールのプランニングというのは、設計上、小さなものとは全然別の方法をとられるのですか。それともミニチュアみたいなものでつくって、拡大すれば大きくなるものなんですか。

●都市設計と建築設計

たとえば都市設計なんてありますね。まずわくをつくりまして、その中で設計

します。すると、必ずわくはいっぱいになりますね。そして壁は邪魔になります。1万人、10万人、1,000万人都市と、スケールがどんどん拡がると、当初とは全然違ってきますね。拡がる可能性のある、どこまで拡がってもいいような設計、なんていうのはできないでしょうか。当初の目的と違って拡大した場合にどう対応するか、という意味なんですけれど。建築にはそういうのは基本的に無理なんですかね。

——建築でも都市計画でも、条件を設定しないと絵が描けない、ということです。ですから条件の設定をどうするかということがいちばん大切なことです、これは、オーナー側と設計者側とで議論して積み上げていくことになると思いますけどね。それが間違っていたか、正しかったかで、将来評価が決まってくるのです。

水谷 条件の中にはお金も入っているでしょうから、無限に拡がるように、というわけにはいきませんね。

——ブラジリアは、計画としては成功だったかもしれませんが、住む人にとっては非常に住みづらい、ということになってきますと、評価は分かれますね。

水谷 みなさんはつくば学園都市はどう評価しておられるのですか。

——やはり成功だと思いますね。しかし、あれもブラジリアと同じでね、あそこに住んでいる人にとってはただの田舎かもしれません。

水谷 誰にとって、というのを限定しなければなりませんね。

——ですけど、いまの時代は交通が発達して、筑波で研究して、東京で情報を仕入れて、週末は別のどこかで過ごす、というような豊かな生活に向かっていきつつあるのではないのでしょうか。

水谷 条件がかわってきた、ということでしょうかね。つくば学園都市をつくったときには、職住接近で、すべてそこで

用が足りるクリーンな街を、とっていたんですけども、実は交通という条件が全然違ってきた。たとえば今後リニアが一本通るとすると変わるでしょうね。——人間の行動半径も全く変わりますからね。

水谷 そうして見ると、いちばん最初の、いったいどれくらいの期間を考えていくか、ということもますます難しくなりますね。

変化が起こってきますと、リニューアルという問題が出てきます。アーバン・リニューアル、都市のリニューアル、という問題。壊すっていうのは、ただ壊せばいいので、大した問題ではないのですか。またつくりかえるということ。

——つくりかえがきいている間はいいですけど、たとえば東京の大手町とか、名古屋の栄とかは、代替地もなければ、その場所でもつくりかえなければならぬ。とするとその銀行なり新聞社なり放送局を、嫁動している中でつくりかえていかなきゃならない、これは難しい。いまいちばん問題になっていることですね。

水谷 住宅を高層化する、というのは難しくないですか。たとえば、都市に50階建てぐらいのアパートをつくれればたちまち住宅問題なんか解決しちゃう、という話がありますが、まあ物理的にはそうでしょうね。

——そういうのは、技術的には簡単ですけどね。いま容積制というのをとり入れておましてね。都市機能を、その容積に応じて考えているのが容積制です。それが電気、水道、下水、特に交通に関わってきます。

●まず社会的機能の充実を

水谷 ということは、都市機能そのものがもっと幅広くならないと、住宅だけ高層にはできない、とこういうことですね。住宅問題は土地問題だ、とわれわれは俗に聞くわけですけども、土地問題だけじゃなくて、そういう社会的な施設を

もっと充実すれば、結構まだ解消できるんですね。

——それはそうです。住宅となりますと、学校、病院といった施設も充実しなければなりません。過疎地に急に人口がふえるのは大変困ることです。

水谷 なるほど、そういう社会的な制約が起きてくるんですね。技術的には可能でも。経済的にいうと、何階建てぐらいのビルがいちばん経済性があるか、ということもあるんでしょうね。

——それがいわゆる土地問題ですね。土地の値段と建てる家の値段が折り合わないといけませんね。

水谷 しかし、いずれにしましても、何か大きなことをやれば、必ずマイナスが出ますね。マイナスは一切駄目だということになると、少しも改善できないということになります。

ある程度のマイナスはあっても、総合的に見てプラスであれば、やっていかなきゃならない、ということは、これからもたくさんあるでしょうね。技術面はいろいろ発達しているわけでしょう。ですから、どちらかという社会的な制約の方をどうするか、という点が少しも進歩していないの、でしょうね。

水谷 研治 (みずたに・けんじ) 氏略歴
現在 東海銀行 常務取締役調査部長
東海総合研究所 副理事長
経済学博士

昭和8年10月 名古屋市で出生
昭和31年3月 名古屋大学経済学部卒業
清水支店長、秋葉原支店長、八重洲支店長、
ニューヨーク支店長を歴任
この間に、経済企画庁へ出向
立教大学、名古屋大学など 非常勤講師
NHKテレビ等出演エコノミストの一人
最近の著書『経済危機の波動』
(東洋経済新報社)

21世紀の都市デザイン

The 21st Century Urban Design Seminar, NAGOYA

講演会テーマ:「現代都市の位相」/シンポジウムテーマ:「21世紀の都市デザイン」
Lecture: "Phases of Modern City" / Symposium: "Urban Design in the 21st Century"

●期日 1989年11月16日[木]・17日[金]

●会場 名古屋ヒルトンインターナショナル

Nov. 16, Thu. - 17, Fri. 1989 at NAGOYA HILTON INTERNATIONAL

●参加費 一般(セミナー・レセプション)20,000円
一般(セミナー)5,000円
学生(セミナー)3,000円

16日 November 16, Thu.

13:00-13:30 開会挨拶

Opening Address / Information

13:30-14:30 基調講演「21世紀の都市と建築」

Cities and Architecture of the 21st Century

丹下健三

Kenzo TANGE

休憩

Break

14:45-16:15 講演「ノマド・都市・デザイン」

Nomad-City-Design

フェリックス・ガタリ

Félix GUATTARI

休憩

Break

18:00-20:00 レセプション

Reception

17日 November 17, Fri.

09:15-10:45 講演「都市と環境のデザイン」

Design of Cities and Environments

クリストファー・アレグザンダー

Christopher ALEXANDER

休憩

Break

11:00-12:30 講演「都市の表層と基層」

Cities, in History

梅原猛

Takeshi UMEHARA

休憩

Break

13:30-15:30 シンポジウム①「都市の方位」

Symposium① "The Way of New Cities"

粉川哲夫・井上章一・三宅理一

Tetsuo KOGAWA・Shoichi INOUE・Riichi MIYAKE

休憩

Break

16:00-16:30 提言「名古屋の都市デザイン」

Urban Design in Nagoya

西尾武喜名古屋市長

Mayor of Nagoya Takeyoshi NISHIO

16:30-18:30 シンポジウム②「日本の都市デザインと名古屋」

Symposium② "Urban Design in Japan and Nagoya"

月尾嘉男・北原理雄・若山滋・三宅理一

Yoshio TSUKIO・Toshio KITAHARA・Shigeru WAKAYAMA・Riichi MIYAKE

●主催
都市デザインセミナー運営会議
名古屋市
新日本建築家協会(JIA)

●後援
建設省
愛知県
朝日新聞社
NHK名古屋放送局

●協賛
株NAX
三協アルミニウム工業株
株サンゲツ
関ヶ原石材株
中部電力株
東邦ガス株
安田火災海上保険株他19社
矢橋大理石株

●協力
アイカ工業株
愛知株
イビデン株
立原陶磁器商業協同組合
株カネキ製陶所
領安山陶器
三和シャッター工業株
東陶機器株
ニッタイ工業株
松下電工株
三菱電機株
ロンシール工業株

●お申し込み・お問合せ
都市デザインセミナー運営会議事務局
tel.052-251-0639

●関連事業 連続プレセミナー「80年代の都市デザイン」

第1回「現代都市の検証」/宇野邦一・八束はじめ・月尾嘉男/9月29日[金]17:00

第2回「都市と環境のデザイン」/北原理雄・堀池秀人・三宅理一/10月13日[金]13:00

第3回「都市の表層と基層」/井上章一・宇波彰・若山滋/10月27日[金]13:00

会場=朝日ホール/無料/定員300名

「RENZO・PIANO展」

11月14日[火]-11月19日[日]/会場=電気文化会館5階ギャラリー/一般700円・学生400円

都市デザインセミナー講師紹介

(敬称略)

丹下健三

建築家、東京大学名誉教授

甥丹下健三・都市・建築設計研究所代表

建設省建築審議会会長

新日本建築家協会初代会長

1913年愛媛県生まれ

東京大学工学部建築学科卒業・同大学院修了

1980年文化勲章受賞

主な作品『広島平和記念会館』、『代々木

国立競技場』、『東京カテドラル

聖マリア大聖堂』、『赤坂プリンス

ホテル新館』、『サウジアラビア

王宮殿』、『シンガポールO.U.

Bプラザ』、『新東京都庁舎』

フェリックス・ガタリ

精神分析医

1930年フランス生まれ

フロイト分析学の批判を通じて、現代文明社会における都市生活者の精神と肉体が、都市空間や都市施設といかなる対応関係を持って変容しているかを追求している現代フランス気鋭の精神分析医。建築家と協働して病院施設の計画にも携わっている。

主な著書『分子革命』、『精神分析と横断性』

共著『アンチ・オイディプス』、『カフカ』

クリストファー・アレグザンダー

カリフォルニア大学バークレー校環境デザイン学部教授

1936年ウィーン生まれ

ハーバード大学建築学部卒業

現代の都市・建築を様々な環境要素の集合体として解析するとともに、従来の固定化した都市計画の超克を提案し続けている世界的な都市建築学者。

主な著書『バタン・ランゲージ』、『コミュニティとプライバシー』、『オレゴン大学の実験』

主な作品『逕進学園東野高校校舎』

梅原 猛

国際日本文化研究センター所長

1925年宮城県生まれ

京都大学哲学科卒業

主な著書『隠された十字架』、『水底の歌』、『日本の深層』

三宅理一

芝浦工業大学助教授(建築史)

1948年東京生まれ

東京大学工学部建築科卒業、エコール・デ・ボザール卒業

主な著書『フランス建築事情』、『世紀末建築』、『愛の建築譚』

井上章一

国際日本文化センター助教授(建築史)

1955年京都生まれ

京都大学工学部建築学科卒業、同大学院修士課程修了

主な著書『つくられた桂離宮神話』、『霊柩車の誕生』、『アート・キッシュ・ジャパネスク』

粉川哲夫

武蔵野美術大学教授(コミュニケーション論)

1941年東京生まれ

早稲田大学文学部卒業、同大学院修了

主な著書『メディアの牢獄』、『ニューメディアの逆説』、『ニューヨーク情報環境論』

月尾嘉男

名古屋大学教授(都市システム学)

1942年愛知県生まれ

東京大学工学部建築学科卒業、同大学院修了

主な著書『装置としての都市』、『実現されたユートピア』(共著)

主な訳書『歩行者のための都市空間』(J・ジュパン)

北原理雄

三重大学助教授(都市計画学)

1947年神奈川県生まれ

東京大学工学部都市工学科卒業、同大学院修了

主な著書『現代の低層集合住宅』

主な訳書『アーバン・ゲーム』(M・ケントレン)

若山 滋

名古屋工業大学教授(建築計画学)

1947年台湾生まれ

東京工業大学建築科卒業、同大学院修了

主な著書『建築に向かう旅』、『世界の建築術』

都市デザインセミナーの講師が正式に決まりましたので、再度紹介いたします。
なお、本誌8月号13ページ、プレセミナー第3回の講師のうち、宇野 彰とあるのは、宇波 彰の間違いでした。お詫びして訂正いたします。
また、セミナーの入場料は、左ページのように一般(セミナー・レセプション)20,000円、一般(セミナー)5,000円、学生(セミナー)3,000円と変更されました。



社会と施主をつなぐ中間者としての建築家の役割

瀬口 哲夫

豊橋技術科学大学助教授

1. 建築家の社会的存在意義

一 設計施工一貫か分離か

建築家の職能について、日本で建築設計をしている人に聞くとほとんどの人は「建築家は施主にかかわって設計しており、建築家の立場は施主の利益を守ることであり」と答える。ではなぜ設計施工一貫体制はだめで、設計施工分離体制でなければならないのかとたずねると、これもほとんどの人が「設計施工一貫体制では施主の利益が守れないからだ。建設会社の中で働いている建築設計者は、その立場上、建設会社の側に立たざるを得ない。したがって常に施主のことを考える独立した建築家とは異なり、施主の利益を守ることを保証できない」と答える。これではなほどうかとだれもが納得しないところに日本の建築界のむつかしきがあるし、こうした論理しか展開しえないところに、設計施工分離に対して社会的支持が少ない原因があるのではなからうか。

前述の論理の前提として施工業者もしくは建設会社は常に自己の利益を考え、隙さえあれば不正を働く存在であるという考えがある。

施工業者もしくは建設会社が仮に悪者だとして、施主の方が設計施工一貫でよいといったらどうなるのか。施主と施工者の間に一定の信頼関係があり、その上で設計と施工を建設会社にまかせるとしたらどうか。これは認められるのだろうか。「こうしたケースが成り立つのは一定の信頼関係がある場合で、例外である。一般的な関係ではない。」という反論ができそうである。施主と大工の関係など

はこの信頼関係にもとづくものである。だが、大工の仕事は限定的で一般的ではない。しかし、一般のゼネコンでも設計・施工一貫で仕事をしているので必ずしも例外とはいえない状況が出て来ているのが今日ではなからうか。

次に施工業者もしくは建設会社は体質として自己の利益に走り、施主に不利益をもたらす存在であるかについて考えてみよう。もともと日本では出入りの大工棟梁という制度があった。前述のように彼らは体制としては設計施工一貫に属する。この場合もお出入りという一定の信頼関係がある。お出入りでない大工の場合かどうか。施主の不利益になることを大工がしないという保証はない。しかし悪い評判がたち、仕事が少なくなることは目に見えている。社会的制裁がある。

ここで自動車の生産を考えてみよう。自動車の生産は設計施工一貫であるが、これがおかしいという人はいないようである。大工などが主に扱っている住宅とどう違うのか。自動車の生産は多量生産で、もし欠陥があれば会社の責任で欠陥車は回収されるし、車の保証もある。こうしたことが車を買う人に安心感を与えているわけで、製品については多くの目によって監視されている。しかるに住宅の場合は一品生産で、ひとつ一つが異なるので施主の利益が守れない。しかし近年では大工のつくった住宅でも保証制度がととのってきており、結構安心してたのめるようになってきているのではなからうか。それでも不安だとすると、住宅などは、自動車のように工業化して売り出した方がよいのではないかという意見も出てくる。事実、工場生産の住宅が増

えてきている。最近では工業化住宅メーカーのものの方が大工や工務店のつくるものよりよいといわれることも多くなった。こうしてみると、住宅の生産ということから大きな変化が出ていないのか。工業化住宅メーカーで働き、自動車メーカーの技術者と同じ立場になっている建築家もいる。住宅のプレハブメーカーは安心できないが、自動車メーカーは安心できるという理屈は通らない。

施工をしているのは大工だけではない。一般建築の施工については建設会社が活躍する。建設会社の場合、組織体であり、会社の利益を優先し施主に不利益をもたらした場合、社会的信用を失ってしまう。とするとそう安易には悪いことをするとは考えられない。

したがって設計施工一貫でも施主に不利益をもたらすことはない。むしろ設計施工一貫により、安くで良い建築をつくれるので、逆に施主に喜んでもらえる。このように建設会社の人には言うだろう。

建築が自動車などと同じであれば、設計施工分離が必ずしも必要ということにはなりそうにない。大工の場合の保険制度や建設会社の場合の社会的責任、社会的制裁というような一定のチェック機構もしくは補完システムができつつある。

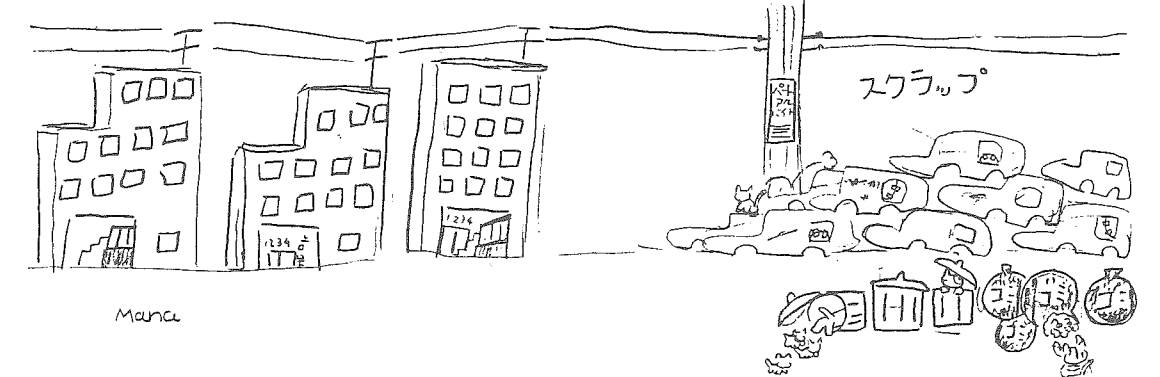
2. 建築と工業製品はどこが違うのか

とすると建築と自動車などの工業製品とは基本的に異なるということがはっきりと指摘されていなければならない。どこが違うのだろうか。自動車は個人が使うものである。住宅は個人が所有し使うものである。しかし一般建築は個人ではなく大勢の人が用いるもので、その点が

一般建築と一般の工業製品と異なる点だという見方をする人がある。オフィスビルなどは住宅と異なり不特定多数の人が使用する。ほとんどの工業製品は個人が購入し、専用して使用する。しかし工業製品の中には不特定多数の人が使用するものもある。たとえば飛行機や客船などである。これらの乗り物がオフィスビルと異なるのは動くということぐらいではないか。飛行機メーカーや造船メーカーは設計施工一貫で、その方が技術も蓄積して結局は注文主に利益をもたらすこと

離が建築の場合どうしても必要ということになると、それは建築と自動車や飛行機などの工業製品の違いを指摘し、その違いが、設計施工分離を要求していると考えられないのではなからうか。設計施工分離の必要性が単に施主の利益を守るという個人的なものでしかないならば、建築家の職能を社会的に支持しなければならない理由は稀薄になる。建築家の職能を社会的に支持するものは何であるのか。それからみて設計施工の分離が必要であるという論理が必要なのではなからうか。

建築と工業製品は同じか。建築を消費財にはいけない。



ができるという。オフィスビルだと、どうして設計施工を分離しなければならないのか。一品生産だからだろうか。どうも判然としなくなる。

オフィスビルなどと異なるタイプの建築として公共建築がある。これはたしかに不特定多数の人々が利用する。多くの場合は市民だが、とにかく大勢の人が利用する。しかも公共建築は管理者はいるが市民みなのものであり、特定の企業や個人が所有するものではない。この点で飛行機や船とは異なるかもしれない。したがって市民にかかわって専門家として建築家が公共建築がしっかりつくられるかどうかを監視する。この点は理屈が通りそうである。公共のもの、たとえば橋梁などの場合も設計者と施工者は別になっている。

以上のように考えてみると公共建築の場合を除いて設計施工分離を支持する論点がこれまでのところ見い出せない。くりかえすようになるが、もし設計施工分

りか。

3. 都市文化を支える中間者の存在としての建築家

私は少なくとも建築を工業製品と同じに考えてはいけないと考えている。工業製品はその機能がなくなれば生命を終えるものであるが、建築はその用途だけのためにあるのではない。建築の空間やファサードは都市の財産であり、文化である。その意味で建築家は古い建物をこわすことに加担してはいけない。建物の使用価値がなくなったからといって建物を取り壊すことは建築を工業製品におとしめるものであり、ひいては建築家の職能をあやうくするものである。逆にいえば、個々の建築はそうした文化的価値のあるものとしてつくられねばならない。建築が個人の所有であっても、それを都市の文化、財産としてつなげていく役割が建築家にあるのではないか。これは施主と社会の中間にあるものとしての建築

家の役割といえよう。こうした役割を担うのは経済活動を目的とする施工業者では不可能である。独立した存在の建築家が経済性をはなれて判断する必要がある。この点から設計者と施工者は別でなければならない。この意味で建築家は都市のあり方、建築のあり方について高い知見を持っていなければならない。社会は建築家に図面を書く役割を求めているだけでなく、専門家、学識者としての立場を同時に求めているのである。

4. 施主と施工者の中間的代理人としての建築家—RIBA—

英国でRIBAが成立し、建築家の職能確立への第一歩をふみ出したとき、この問題をどのように考えていたのであろうか。RIBAは「ジョン・ソーンの説いた職能実務の原則—建築家は本来、雇主と建設者との『中間者』である—を具現している。」という考えにもとづいてるとされる。中間者とはどういう意味であろうか。「建築家はその名誉と利益を考慮すべき雇主と、その権利を擁護すべき職人との間の中間的代理人である。」という。したがって、建築家は自分の設計したものあるいは自分の監督のもとで施工されるものでない工事の見積り、査定、評価に従事してはならない。この種の仕事は見積師の仕事であり、こんな仕事をしては建築家は中間的代理人としての役割をはたせないからである。こうした態度を保持し、建築家は建築工事費に

対し注意深く監督をし、施主の経済的利害の保護に携わった。一方自分の使用する者の過失、怠慢、無知に対し責任を負う存在であるとされた。ここでは建築家の技術や知見に対し全面的信頼がおかれている。こうした見方からすると、日本でいう設計施工一貫体制、つまり建築家が建設会社もしくは施工者側に雇われて働くということは、中間者にはなりえないし、施工者に対して責任を負うこともできないということになる。

今後、建築家はRIBAのいう中間者としての建築家像にとどまらず、施主と社会という両者をむすぶ存在としての意味をつけ加えるべきであろう。100年以上前のRIBAの規定はある意味では当時の社会を反映したものである。多くの建築家の努力によってつくられた都市は一つの文化を呈示しており、こうしたストックの上で建築活動をしていくという価値が重要になってきている。現実にはこうした都市の状況に対し、英国の建築家は積極的な発言をしている。日本の都市はその様相を時々刻々変えつつあるとはいえ、こうした役割がないわけではない。英国で建設工事をしている日本のある建設会社の人が言うには、「設計施工でやれないこともないが、手続などいろんな面倒くさいことがあって、ここではやはり建築家に頼んだ方がよいですよ。」なるほど、古い建物を取り壊すことができず外観を残しての工事で、ひとつ一つの変更にも許可が必要。これには専門家が必要というわけである。建築家の役割の一つがここにあるといえよう。手続や法律についての深い知識を持つことがここでは求められている。日本の状況とは異なるかもしれないが、建物をつくるという行為でない行為が社会的に求められている。建築家の職能確立にむすびつく設計施工分離ということを考えるに当たって、建築の価値といったもの、あるいは特別な人のみが可能な芸術的創造ということにとらわれない建築家の仕事を明確にする必要があると考える。

J I Aに期待するバラ色でない未来像

林 英 光

愛知県立芸術大学助教授
環境デザイナー

私たちの周辺は、色、形、音、光、嗅、味、テクスチャー、薬、電波など、様々な「暴力」にさらされている。それらを形成し、支えているのが建築などの各種のデザインである。きれいなゴルフ場でプレーを楽しんでいても、戦後のホリドールや、パラチオンなどの農薬づけの田んぼで遊んでいるのと同じようにひどいものらしい。当時小学生であった私が覚えているのは、農薬散布作業で多くの人々が死亡し、田んぼや小川の魚貝類、虫、鳥、小動物の天国は一気に消滅し、子どもたちの遊び場も失われたことである。

戦後の産業の復興、発展による環境汚染に先だつ最初の変化であったように思う。おそらく縄文の後期から始まった稲作の頃とほとんど変わっていない田んぼや小川は、あらゆる生きものの宝庫であったと思う。直径10cmもあるまっくらな田螺や雷魚、大きな源五郎ブナやボラやイナの大群、あたりが真白くなるほどの大小の白サギの群。戦後は明治20年くらいにほとんど絶滅しかけた生物へのトドメであった。体制が変わると環境に大きく影響が出るのは、今更のように驚くばかりである。また、戦後の農地開放は、現代の細分化された無秩序で美しいバラ

ンスを失った荒れ果てた国土をつくるきっかけの一つであったと思う。

今や米国の圧力で作らない方が得みたい稲作のために、2000年も続いた農村の秩序と環境を、ほんの数年で滅ぼしてしまったのである。生物への思いやりのなさは、明治の廃仏毀釈以来さらにエスカレートし、世界的な傾向であるとはいえ、日本の状況は最悪である。しかし、このむごたらしいほどの殺風景な国土と都市景観にすっかり慣れてしまったことは、大変恐ろしいことのように思う。このような激動に対してデザインや建築は何も為すことができず、ほんのわずか繕うような後追いの行為しかしてこなかったばかりか、文化の破壊に手を貸してきたように思える。

文化とは国民の民度のバロメーターで、それ以上のものはやはりつくれないように思う。

車一つでもいつまでたってもデザインはヨーロッパの水準には程遠く、デザイン博にも日本人のすべてが表れている。行政の組織から経済の仕組み、企画、立案、設計するシステム、人々の教養を含め、物質的暮らし向きだけがここまできたのは奇跡かもしれないと、時々思うことがある。

簡単にいうと、デザインは色や形でしか社会に貢献できないが、こんな簡単なことがきちんとできなくて、もっと複雑な見えない部分が良くできているわけがない。そのくらい重要なものではあるともいえる。しかしここでデザインの大切さが行きわたってきつつあるいま、デザイナーの役割も当然変わってきている。それは文化の根本問題に対してもっと発言すべき時にきているということである。もっと政治や社会に対して働きかけていく余裕とバイタリティが必要ではないだろうか。行政や経済、技術の後追いとしてのデザインから、文化としてのトレンドを打ち出し、さらには地域社会に働きかけ、小まわりのきく運動を展開すべきであろう。また特殊ともいえる同業者集団の中だけでなく、社会のあらゆる人々に共通の大きなテーマである環境問題や生活の有り方を、毎日の多忙さに負けず訴えつつける息の永い積み重ねが必要だと思う。政治家や弁護士、教員などは、ある種の党派に組み込んでいるような目で見られる人も多く中で、デザイナー、特に建築家は、このような行動や発言をする立場として最適であるように思う。すでにそれぞれの立場や仕事を通してやっていることではあるが、狭い範囲で終わらせるのではなく、膨大でとりとめもない混沌とした時代、生活環境の再構築や、ある種の秩序を創るため、テリトリーの枠を越え、それぞれの経験を生かした発言の場をもっとつくるべきであろう。つねに同じような顔ぶれの、観念的な講演会やシンポジウムではなく、できるかぎり幅広く訴えかけのできる手段もそろそろ必要である。関係の一新聞社やTV局の取材に終わらせてしまわない力を充分にJ I Aは備えている。みなが好き勝手なやり方や発言をしている自己中心的でマイナー

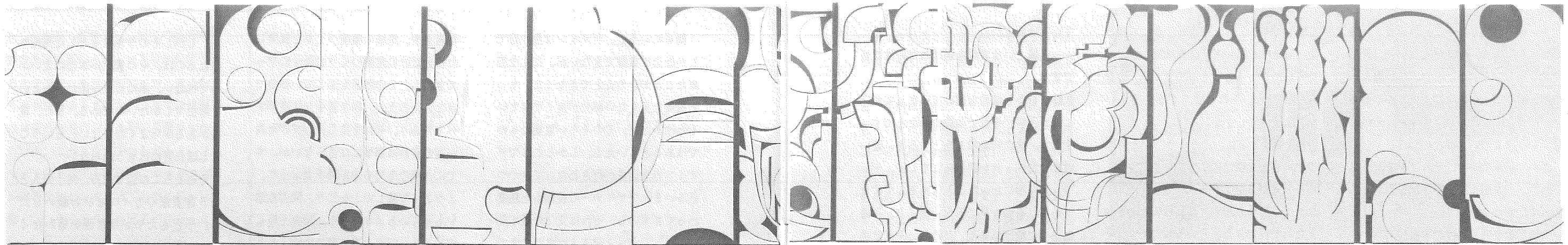
な考えや、地域の環境づくりを放棄した自分だけの建築づくりは存分にやってきたし、その限界も感じているのではないだろうか。好き勝手な仕事がすべてであり、それを良しとしてきた我が国の実情は簡単には直らないが、すでに一般の市民の方が関係者以上に、どうあって欲しいかを知り、問題意識をもっているように思う。世界で最も美しい街並、都市環境にすっかり慣れきってしまったのは建築家ではないだろうか？ 良いものをどんどんバックアップし、良くないものをはっきりと指摘し、論議していく場はJ I Aの体質にはないかもしれないが、まあまあといった日本社会の構造そのままでは済ませられないところにきている。地球が減りそうな時に、なにあの関係であって良いのだろうか？ はっきりと互いに批評し合うことを手始めに、大同小異で、新しい流れを示して欲しい。いま私が携わっている道路や公園、モール、橋などの土木の分野は、公共事業ということもあり、比較的やり易く、よくなるきざしが見え始め、新しい方向性をつかみつつあると思う。しかし、これらがいくら良くなったとしても、一步入った私有地の状況は百年河清を待たなくてはと思うほどの問題をかかえたままである。

個々で考え、それぞれ勝手に設計した方が楽であろう。街中を埋めつくしているてんでんばらばらのひどいデザインの建物は、おそらくすべて建築士の免許をもっている人たちが設計しただろうということは子どもたちでも知っている。教養もある立派な人たちがなぜあんなものをつくり続けていられるのか、多くの国民は不思議に思っている。海外へ出た人々は帰ってくるなり、都市でも田舎でも別荘地でも、そのむごたらしい景色にがっかりす

る。しかしそのうちほっとした気持ちになるのは、その景色が本当によいからではない。単に自分の国だからという理由でしかないのである。また、電柱があるからよくなる、ということも隠れ蓑にはもうならない。

そろそろこの辺で何万、何十万人という建築家の方々にぜひお願いしたい。子どもたちが風景画を描かなくなった理由や、みなが生活に本当の豊かさを感じられない理由の大きな部分に、建物がおそろしいばかりに美しいこと、魅力のない設計とその周囲の殺伐たるべき具合、それによってでき上がる景色があることをしっかりと心にきざんで置いて欲しい。そして、地球規模での人類の危機の中でも、雄大できめ細かい、せめて人間に優しい、子どもや老人、体の不自由な人々のことを考えた、たとえバラ色でなくとも未来への指針を検討し始め、再び美しい日本の国土を創り直して欲しい。

J I A以外にこの役割をはたせる団体はないと、私は想い続けている。



鋼鉄による作品 長い手紙-0 1988年 ステンレス 100×655cm (100×131)×5点組

久野 真の世界

創造の源を探る長い手紙

久野 真——名古屋を代表する国際的前衛芸術家であり、その作品はニューヨーク近代美術館、東京国立近代美術館をはじめ、数多くの美術館のコレクションとなっている。

1921年、名古屋市生まれ。43年、東京高等師範学校芸術科卒業。早い時期に前衛作品の創作を始め、この20余年間は、ひたすら金属と取り組んできた。

今年の6月から8月にかけて、名古屋の桜画廊で6年振りの個展を開いた。冷徹で禁欲的な直線から、どこかユーモラスでさえある曲線へ。

知の最前線を見つめながら創作活動を続ける久野 真の世界には、未知の地平をめざす、新たな展開が見られる。



知性と感性を新たに捉え直す

——作品の発想はどんなところから生まれて来るのですか。

久野 自然に出て来るのを待つんです。無理に何かをつくらうとしたら、結果はやっぱり無理になるでしょ。

釣りをやっても、自然流っていったね、まず水の流れを自分の肌で感じるんです。一見したところ、水は同じように流れていると思うけれど、流れている水と水の間に隙間のような、何か妙なところがあるんですよ。鮎釣りをやっていると、鮎はその隙間に休んでるね。そして敵が来たりすると、そこからピッと動き始める。そういう水の自然を感じるということ、

それが自然流です。

——感じとる力が大切なのですね。

久野 人間を分析すると五感というのがあって、それを感性とったり感覚とったりするでしょ。その感性というのは、いままでの考え方ではいちばん原始的な脳の働きだとされていたわけです。見るとか聴くとかというのは当たり前のこと、頭脳とは関係ない、とね。それよりも知性の方が大事だと。

人間は18世紀からずっと19世紀、20世紀の現代まで、哲学を中心として知性で押してきたわけです。ところが、それがみな破綻してきちゃった。だから、たとえばヨーロッパではトインビーという学者が『西欧の没落』という本を書きま

したね。ヨーロッパは知性でもって現代の文明を築いたと思っていたけれど、もうすでに崩壊の前兆どころか、相当崩れてしまったんじゃないか、と。

それで、よくチェックしてみると、確かにもう知性じゃ間に合わない。頭で考えたことが、現実社会に適合しない。同じように芸術の世界でも、頭で考えた絵というのはもう通用しません。誰が見てもわかっちゃうから。これは推理小説を逆から読むようなもので、つまらんです。もう少し、いままでなかったような別な世界を見つけなきゃ、という方向に世界中が、特に頭のいいヤツが向き始めたわけです。

そうすると、いまの感性の世界が不思議な現象として出てくるわけ。簡単な例を挙げると、経済学の世界で、ものが多量に出回っているにもかかわらず値段が少しも下がらない、むしろ上昇する、スタグフレーションという現象がありますね。頭で考えたままの経済学の原則には合わないわけです。その原因は何かというと、一般大衆、われわれ庶民、その感覚が知性を狂わせるんです。欲望が世界中に溢れているといってもいい。

——知性で考えた通りには動かない、感覚的要素が動くということですね。

久野 ただ重要なことは、知性は完全に駄目なのではない、ということ。そこに目をつけて「知の感覚」と名づけた中村雄二郎という学者もいます。いままでの感性とか感覚は、人間の生きている根源

的な働きだったわけだけれど、それに知性が、私の考えだと、恐らく30%ぐらいバックボーンとして混じっているんですよ。そして、感性が70%で知性が30%っていうようなかたちで、人間の中の別な能力を新しく開発しなきゃいけないような状況が現在あるということです。

私の絵に関していえば、さっきの話からすると、非常に感性っていうか感覚的な表現で作品ができてくるように思うでしょ。でも、そんなに簡単には割り切れない。

感性の世界へ突入する現代数学

科学の世界は、芸術の世界と逆で、知性が70%で感性が30%ぐらいになってますね。それが、とっても面白いことに、完全な知性の世界だと思っていた数学が、30%の感性の世界へすばらしいスピードとエネルギーで突入し始めている。あいまいな言葉で築かれた哲学が駄目になったのに対して、数学がその代わりにいまや猛烈な勢いで研究開発されているのです。R・トムの「カタストロフ理論-トポロジー」やB・マンデルブローの「フ

ラクタル幾何学」などがその例です。

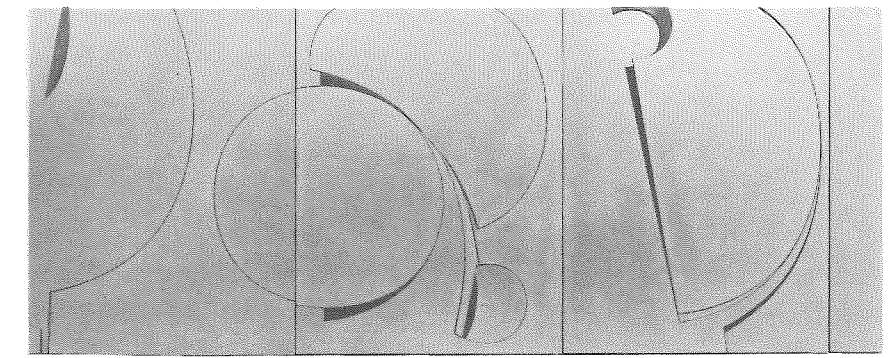
いま、コンピューター・グラフィックスの重要なデータの一つである、フラクタル理論では、地球上の最も複雑な地形、たとえばリアス式海岸の周囲の長さをいくつかの数式で表現しています。そしてそれは無限の長さにどんどん近づいていく。つまり彼は哲学の「無限」という概念を数式化してしまった。しかもそれを眼に見える複雑で不思議な図形にしてみせるのです。位相数学で、トムがカタストロフィ（破局）という概念を数式化、図形化したように。

新しい人間世界の組み立ては、いまようやく始まったところだと思っただけ、これから50年ぐらいの間は、このような方向へ人間の全知能が結集して、人工頭脳の完成へと進んで行くと思いますね。

自分を空白にして線を引く

——具体的には、どんな風に作品を描いていけるのですか。

久野 静かな部屋で、一人で、いつも座り慣れたイスに座って、白い紙と鉛筆が



鋼鉄による作品 4つのかたち(部分) 1989年 ステンレス

一本、消しゴムが一つ。それでもって線を引くんです。何も考えないで。何も考えないということ、それ自体が難しいのね。だから、それをなくすために音楽をかけるんです。音楽はクラシックが邪魔にならなくていちばんいい。

静かに鉛筆で線を、それこそ任意に引くわけ。一本引くと、呼び起こすものがあって、また一本引く。

——線が線を呼ぶわけですね。

久野 しかもその線を引くときに、時間をかけてゆっくり引く。直線を引くときでもそうですよ。ピーッと引くと死んだ線になる。だから1cmぐらいずつないで、ゆっくり直線にするんです。

やっているうちに、だんだん自分の気持ちと線の間に異和感がなくなるわけです。クラシック音楽は聞こえているが聞いてはいない。ロックとか、この頃の若者の甘い甘い歌は駄目。浮世の垢にまみれすぎです。

さて、こうして線を引いていて、何本かになると、何か知らないけれど「あ、駄目だ。」って自分でわかるんです。まだこれは自分の思っているのとは違うな、自分の見つけたものじゃないな、と。そうすると、それはやめてしまうんです。そしてまた次に移る。こうして永いときは4時間ぐらい、枚数にすると100枚～150枚ぐらい書きます。100枚で3枚残ればいい方かな。

今度は、その3枚を基にして消しゴムが始まるんです。線の中で、ちょっと自分の感覚と違うな、カーブがこうなればもっとよくなるだろう、というのを消し

て直してやる。消して直し、消して直し、元の形がなくなって、最後に消し跡だけで何もなくなってしまって、「あ、駄目だった。」というのも出てくる。そういうのは捨ててしまう。

不思議なことに、そういう空間と時間の中に自分を空白にして置いておくと、あるときポッとできるんです、「あ、できた!」というのが。これは何も手を加えないで「できた」という瞬間です。それはきっといいものだから、大切に作品になるのです。男と女が愛し合う出会いの瞬間、道で視線と視線がパッと合っただけでパチッと火花が散る瞬間、あれですよ。意図も何もなくて。そういう瞬間を見つけないわけですね。

——これだけの作品をつくるには、膨大な時間がかかっているんですね。

久野 6年かかったんだからね、前の個展から。時間をかけなきゃ駄目ですよ。

時間ってというのは4次元の空間でしょ。これをみんな考えなさすぎるのね。3次元の立体までが世の中だと思っただけ。アインシュタインが初めて時間の考えを導入したんだけど、われわれの生活の中で、時間をデータとして自分の脳ミソに本当にキャッチして人生を送るということ、これはまだ一般的には行き渡っていない。老人になるとようやく過去を振り返って反省して、いろいろ考えるけれど、それはもう後の祭り。日常に時間を組み入れて、行動を起こして、作業をするっていうのか、人生の意味をはっきりさせるっていうのか。数学は、4次元どころか5次元、6次元まで追求し始め

ているけれどね。

——金属という素材を選ばれたのはなぜですか。

久野 むかし油絵を描いていましたね。これが下手。それで油絵をやめたんです。そして、次に何か描こうとすると、若い頃学校でデッサン教わったでしょ、デッサンが一番になったこともあるんですよ。だから、ものを見て何かを描くと、正確に上手に描けちゃう。だけど、それは単なる技術であって、絵というのは見えるものをそっくりに写すことじゃない。もっと大事なものは自分の中身の方でしょ。そこから脱却するのに10年はかかりましたね。

新しい人間像を表現する

なぜ金属かという、私は、なるべく難しいというか、硬いってというか、ぶつかってはね返されるような強いヤツと格闘しなきゃ男じゃないと思っていたわけ。硬い素材の代表というと、石と鉄ですよ。石は私に合わないと思って、それで鉄にしたわけです。その前に使っていた素材が石膏でしょ。これはもう柔らかくて、自由に何でもなるんです。一生やる仕事じゃないと思ってやめました。

——ずっと直線を使っておられたのに、今回曲線を使われたのはどうしてですか。

久野 抽象絵画を非常にわかり易く区別すると、ホット・アブストラクトとクール・アブストラクトというのがあって、情熱的なアブストラクト、それから冷たくて理知的なアブストラクトの二通りあるわけですね。

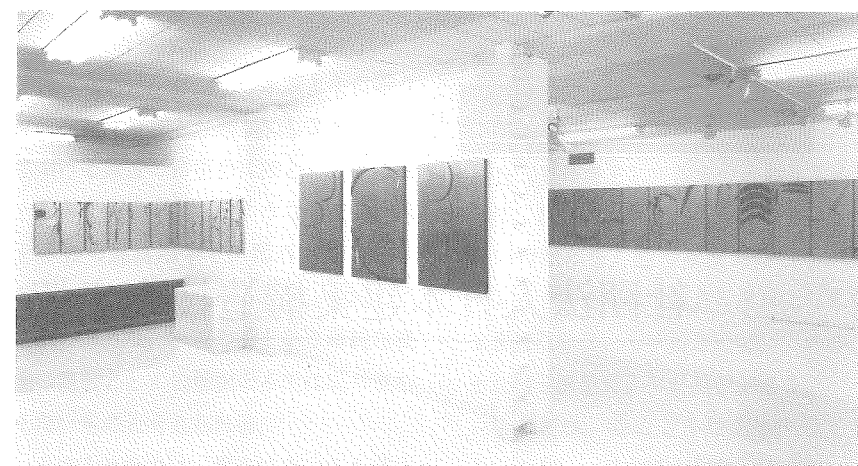
ホットの方は、何が描いてあるかわからないにしても、絵の具がいっぱい散りばめられていて、岡本太郎じゃないけれど「芸術は爆発だ!」っていう世界です。悪くいえば、感情にほとんど支配されてぶつければいいわけです。

一方、クールの方は、いらぬものを全部取り去って、引き算して、引き算して、そこに一つの秩序とか調和をつくり出す。そこからモンドリアンのような数学的なアブストラクトが生まれたわけです。モンドリアンは、最後直線でおしまいだ。数学の世界で基本的な図形っていうと、直線と曲線です。私は直線がある程度までやったでしょ。そこで反省してみると、もう60歳になってしまっていた。平均年齢からして、70いくつまであと10年しかない。曲線を目標として立てて、それにぶつかるのは、あと10年しかないんです。だからこの際やってみたわけ。そうしたら、みんな何かのイメージがくっついて、象徴になって、感情に訴えるものになって、という格好にいまなっているけれども、不思議さを解明して新しい人間像といったようなものをチラッとでも感じさせる作品ができればなあ、と思っています。

——久野先生のむかしの作品にも曲線が使われていますが。

久野 あれば若い頃のこと、何も難しいことを考えてやってませんよ。もう自由自在。好き勝手、やりたい放題というのが好きですよ。これはやるべきです。やりたいことやって、挫折を大いにして、悩んだり苦しんだり七転八倒しなきゃ駄目。そうしないと若さを卒業できないと思います。

——その後、直線に向かわれたのですね。久野 そう。面白いと思うもの、味のあつものは全部やめていったんです。だけど、それはある程度若い頃のこと、また別な意味で年をとるとある自由さができるんですね。禁欲的にあと10年なんてつまらないでしょう。



久野 真展 '89.6.10-7.10 於：桜画廊(会場風景)

——これからも曲線を使った作品をつくっていくわけですね。

久野 もちろん。自然にまかせて、自然流だね。

——いままでと違って、作品に具体的な題名がついているのはなぜですか。「長い手紙」のように。

久野 これは簡単で、要するに直線の作品には題名のつけようがないんです。そういうさめた作品を曲線で作ろうとしたのですが、どうしてもいまのところつめたい。コンパスで描いた円だけがいくらかそれに近いのですが、やっぱり太陽とかおまんじゅうとかに結びつけられてしまいます。

そこでいっそ居直って題名をつけて他の作品と区別することにしました。でも当初の目的のために円、楕円、サイン・カーブ、双曲線など単純でたしかな線だけを選んでるんです。

形が形を呼び起こす不思議

——「長い手紙」はいくつかのパネルできていますね。

久野 一つのパネルができると、それが次のパネルの作品を呼び起こすんです。

——最初、手紙の発信者は久野先生、受信者はわれわれ見る側の人間、という関係を思い描いたのですが、製作過程をうかがっていると、久野先生から久野先生への手紙でもあるんだな、という気がしてきました。

久野 そう、それもそう。私がいちばん

不思議に思うのは、形が形を呼び起こすといったけれど、何で呼び起こされたのか、ということです。自分の頭の中で、何でこんな形を呼び起こしたのか、これがわからない。そこで、それを知りたいわけ。呼び起こしてできたサンプル、それをたくさん作って、そこから何か原因がわかるんじゃないか、と。だから、私の作品はそういうサンプルにしかすぎないわけですね。呼び起こした形はこんなだった、そしてこんな風に移り変わっていった、とね。

この手紙は、たまたま私のスタジオの壁の長さの関係で6m50でやめたけれど、本当はいくらでも無限に続きますよ。

脳ミソの構造と働きをもうちょっとよく知りたい。脳が働いてその形にする仕組みをね。

——最後に、久野先生は世界的に活躍なさっていますが、なぜ名古屋に留まっておられるのでしょうか。

久野 いいところですよ、名古屋は。とにかくまちの中が静かですよ。こんなおっとりしてゆったりしたまちは他にはありません。いろんな雑音が入らずに自分の世界をはっきりさせるためには、こんないい都会はない。しかしデザイン博覧会は騒々しいね。静かになるのを待っています。かわったことを何もしないこと、いらぬものをとり去ること、これもデザインの重要な要素です。静かで心ゆたかなまち名古屋にしたい。それが即国際的な都市になる近道だと私は思います。



鋼鉄による作品 弓-2 1988年 ステンレス

社団法人日本建築構造技術者協会へ改組して

渡辺 誠一

(株)日本建築構造技術者協会中部支部長

構造家懇談会が昭和56年に発足して以来、懸案でありました社団法人化がこのたび、7月1日付をもって、建設大臣の認可を得ました。名称については、せっかくみなさん方になじみのできた構造家懇談会から、上記のような名称になりました。任意団体での名称は、あまりとやかくいわれませんでした、いざ法人格の団体となりますと、所管の建設省はじめ関連諸団体のご意見を拝聴いたすところでありました。しかしながら、関係各位のご支援をいただき、法人格の団体へと改組することができた次第であります。すでに業界紙などでご案内のとおり、矢野会長は設立総会での挨拶で「これで当協会はひと回り大きい団体として行動していくことになり、責任は重い。しかし、これまでの活動からみて心配はない。社会的責任ははたせる。」と述べています。私どもは、この7年間の実績をベースに、当協会の目的である「建築構造の設計、工事監理等に関する学術・技術の発展を図ることにより、建築物の質の向上に貢献し、もって社会公共の福祉増進に寄与すること」にいっそう努力いたす覚悟であります。そのために、従来の事業に加えて、新しく、構造家の重要な役割を顕在化し、次の世代を刺激し、活性化を図ると同時に、その活動を社会に顕してい

くための顕彰制度や建築学会の指針や建築センター指針はあるものの、設計業務はそれらの技術を総合して一つの建物を結実させるものでありますから、設計の立場でそれらを見直し、新たな基準作成のための検討委員会などを設けることになっています。また、設立記念とあわせて構造技術者の地位の向上、確立のためにも、私どもがはたしている役割を理解してもらおうためのイベントの開催を来年早々に計画しております。

さて、中部支部も、法人の認可と同時に支部として発足いたしました。会員数も協会全体では正会員2230名ですが、中部支部の正会員は222名(平成元年6月現在)と大幅に会員増がありました。

支部活動も旧来にまして、新しい法人の団体支部として活動していく計画であります。特に中部支部では、行政との連絡会(愛知県)を毎年行って、行政に対する協力と同時に構造確認業務への提言などを行ってきました。その成果の一つが全国にさががけ本年6月より実施となりました。構造チェックリスト添付による構造計算書の添付省略であります。いまのところ全建物ではありませんが、当支部の一つの実績として今後、行政のご指導をいただきながら、レベルの高い提案をいたしたいと思っています。

また、関係諸団体との交流も深めたく、特に貴団体には、ますますのご指導をお

願いいたたく存じます。

また、法人化した当協会の中部支部設立のおひろめの行事として、9月28日(木)にオープンの講演会を予定しております。講師は建築家・原広司さん、構造家・木村俊彦さんをお願いいたします。このほか、例年の見学会、研究会など、いっそう活発に行いたいと思っています。

このような協会全体としての活動と地域に根ざした活動を通して、会員相互の研鑽と親睦を図りつつレベルの高い団体へ発展いたし、建築家のみなさんのパートナーとして、そのご期待にお答えできるよう努力いたすところであります。どうか、今後とも建築家諸氏のご指導、ご協力をお願いいたします。本紙のこの一頁を、私どもの会員がこの一年担当させていただきます、みな様方に、構造の側面から述べさせていただいておりますが、ご叱咤、ご意見を頂戴できれば幸いです。

私どもの団体が社会的に認知されましたのを機に一言ご挨拶申し上げます。

(H. 1. 8. 3)

それはレジデントとトランジェントの接点 コミュニティの中核は小学校

日比龍美
日比龍美環境建築設計室主宰
名城大学建築学科非常勤講師

学生になれば、かつての家族とその織りなす家庭は崩壊し分解してしまう。そこにおける家族の再集合はほとんど絶望的と言ってもよい。このような家族の形成と分裂の過程の中で、都市とコミュニティのかかわりをみると、地域の小学校の存在は、教育の場という単純な機能の施設としての解釈のみでは成り立ちえないものと考えられる。

日本の社会では、都市にあっても農山村においても、コミュニティの中核は小学校ではないだろうか。私たちは「学区」という単位をよく目にし、その中に身をおいている。地域のあらゆる共同行為の中心が学区であることに思い至るのである。

子供会、廃品回収、町内清掃、夏祭り、子供会や神輿、町内会の盆踊り、そしてこれらのすべてにかかわる連絡回覧板というように、コミュニティの行事はすべて学区中心である。帰結するところは、すべて子供たち(小学生)を中心として企画運営されるのである。

都市におけるコミュニティの中核は小学校……これを前提にしてこの内容を進めていきたい。

これは日本の特殊な実体であるかも知れないが、都市生活、農山村生活を問わず、コミュニティ活動とそこから発生する大人たちのコミュニケーションは、非常にまとまりを持った規模と効率によって運営され、ほとんどが小学生である子供を媒体にして発生し発展するのである。この発生と発展という意味において、他のどのキッカケよりも子供たちの存在は大切であり、大きなものなのである。さらに、農山村に比べ都市においては、もうひとつの大きな要素が加えられる。それは農山村よりも都市にはトランジェントがより多く存在することである。この存在が都市生活の最大のダイナミズムを生みだしているものであり、レジデントとトランジェントとの生活感の共有がコミュニティの形成としての意味を持つものと考えられる。

これは日本の高度経済成長と共に顕著

トランジェントの多くが家族全員で行動を共にするのは、子供が幼児期から小学生までが大多数を占めるであろう。中学・高校ともなれば、家族は父と母子の二つに分裂し放散する。さらに子供が大

都市への提言

になった現象として周知のとおりであり、一様に転勤族と言われる人たちをさせばよいのだろう。彼ら家族が移住し、コミュニティに接する点の最初にして最も濃密なのは、小学校なのだ。これは、それほど身近であり必然性がある。

小学校は、このような意味からもコミュニティの中核と位置づけられる。

しかし小学校は現在私たちが知るかぎりにおいて、初等教育の場としての目的の施設と機能のみを持っているにすぎないのだ。これまで述べてきたコミュニティの中核にある小学校、そしてレジデントとトランジェントの接点の場としての小学校を考えると、都市機能の多様性と背景に高齢化という社会現象を考え合わせながら、地域の核であるレジデントに子供の教育と自身の教養に関心の深いトランジェントを活力として加え、これから形作るであろう地域社会を考えると、小学校施設は都市施設、地域の施設として複合体(コンプレックス)としての機能を持たねばならないと考える。その目的の中核となるものが教育であることは当然であるが、さらに知的接触の場としての機能も加えるべきであろう。これは日常生活の中で、母親である女性の健康と教養に対する強い関心に、いかに応えるかということである。

さらに現代の社会的背景には高齢化社会とコミュニティとの関わり合いが考えられる。一人の人間としての社会に対する奉仕と相互扶助との関連において、これらの施設の近接が図られるべきであろう。子供たちの日常に老人の姿があることによって、核家族として成長してきた彼らに、奉仕と相互扶助の意識の芽生えを期待するのである。押しつけではないけれど、このような意識的な場の設定が、これまでの白々しい社会にはない人間関係を作り上げていくのだと思う。老

いていくものにとっても、隣人としての活力ある子供たちとの何気ない自然の接触は、計り知れない安らぎをもたらしてくれるに違いない。優しくやわらかい社会を作り上げていくためにも、このような日常生活の近接化が大切ではないだろうか。直接的な保障や福祉によるばかりではなく、人の社会そのものの在り方を変える教育の場とコミュニティー、これを目指していくのはどうだろうか。

これまで地域集会所あるいは公民館がつくられてきた。しかしそれには幅広い運営と認識にたった使用のされかたがなされているとは思えない。時にはその存在すら定かではなく、いつ使用されるともわからない、そのような施設であるような気がする。

子供たちも老人たちも、男も女も何時とはなしにより集い、さわやかなざわめきと活気のある地域の中核は作れないものであろうか。

私はこのような好ましい情景を、時に区立図書館で体験する。

さて、このように小学校を中核として複合施設を作ることを私は提案する。小学校教育の中において、レジデントもトランジェントもひとつになり、子供を中核として将来の高齢化社会に備えるべきであろう。21世紀に向け、身近でありながら新しい社会形態を作る実験に向けて私たちは一歩を踏み出そう。未来を支える子供たちと、コミュニティーを知っている女性たち、そしてすべての人たちが味わうであろう老いに対して私たちは現実としてコミュニティーの中核に小学校を中心としたスクール・コンプレックスを今つくろう。そして、トランジェントの子供たちが成長した何時の日が、もう一度原初体験と原風景としてのふるさとのこの街へ、回遊ではなく家族と共に定住するために訪れるのをレジデントとしても楽しみに待ちたいものだ。

テーマ Urban Identity 都市デザインシンポジウム

ユニーが9月23日に開催

ユニーが、J I Aと名古屋市共催の都市デザインセミナーに先だて「都市デザインシンポジウム」を開催する。

テーマは「Urban Identity」-都市デザインの可能性-

開催日時は今秋9月23日(土)10時より17時まで、会場はICA, Nagoya

講師およびシンポジウム内容は、「日本の都市のアイデンティティ」-仮設的建築からの発想-と題して、若山滋名古屋

屋工業大学教授と山口昌男(文化人類学者)の対談。「日本の建築・都市デザインの可能性」について、石井和紘、内田繁、若山滋の座談会。「都市へのアプローチ・ヨーロッパ編」-ロンドンにおける建築プロジェクトの展開・仮設的建築の有効性-について、ピーター・クック&クリスチーナ・ホーレイ、「アメリカ編」-リベスキンド流・都市の解説方法-ベルリン・ニューヨーク・東京-となっている。

新刊案内

現代の数寄屋住宅 建築フォーラム編

A 4版、P.174 定価¥7004

(本体6800) 学芸出版

伝統の意匠と技を鋭敏な感覚で甦らせた現代の数寄屋住宅12例を徹底的に詳解。建築家・施工者・施主の方々へ。

施工単価資料 '89下期版 積算資料別冊

B 5版、P.727 定価¥3920

(本体3806) 経済調査会

ビル建築・一般建築の設計と見積りに欠かせない材料単価と材工共単価資料

(付) 建設機械等損料算定表

すっきりひろびろインテリア

山本其親代著

A 5版、P.214 定価¥1340

(本体1301) 経済調査会

住宅、中でもインテリアへの関心が高まり、量から質、さらに個性化、自己主張の時代に主婦の目からみた住まいのプラン

グッドバイポストモダン 隈研吾著

B 6版、P.193 定価¥2472

(本体2400) 鹿島出版会

80年代活躍した11人のアメリカ建築家との対談集。90年代の建築はどうなるか!

ほんもの居住学

清家 清著

B 6版、P.222 定価¥910

(本体883) 情報センター出版局

21世紀の住まいは……著者の経験と思考から家族の容器である住まいの知恵 100項目

こまごま古道具

加藤恵子著

新書版、P.227 定価¥1550

(本体1505) 星雲社

下北沢に古い品物を扱う店「あんていかーゆ」を開店して10年目の店主が心にかかる「もの」と現代の人々の姿を描いた。

(丸善調べ)

製品紹介

National/Panasonic

心を満たす先端技術
Human Electronics

ASTROVISION

空間演出の魔術師・高輝度アストロビジョン

多種多様な新しいメディアの出現により、環境空間での視覚化が恐るべき速度で進行しております。視覚による空間演出が求められる時代にビジュアル的ソフトのフレキシブル性に富む大型映像に熱い注目が浴びせられております。そんなニーズに対応すべく、あらゆる環境条件での空間演出を可能とした大型映像表示装置「高輝度アストロビジョン」です。大型映像技術に求められる「明るさ」「鮮明度」「大迫力」を中距離用新型高輝度放電管16'の開発に惜みなく追求いたしました。人びとが「知りたい」と思っている事に応え、「知って欲しい」と思う事を伝える貴重なコミュニケーションも大切に実行します。

空間演出の魔術師、全てをひとつにする「高輝度アストロビジョン」AZ-1600シリーズに期待して下さい。

設置場所としては次のような場所が最適です。

- 広告塔(ビルの外壁)
- 駅コンコース・ターミナル
- インフォメーションフロア
- 多目的ホール
- レジャーランド
- 競技場



上記商品についてのお問い合わせは——
松下電器産業株式会社システム営業本部中部支店
公共システム課まで…… TEL 052(951)6211(代)

株式会社 INAX

トイレの合理性を実現した“システムトイレ”

「設計から施工までのトータルな視点でシステムトイレを実現」

INAXシステムトイレの特長

- 合理化を促進した独自のシステム工法
工場でフレーム、ボード、タイルを一体化したタイルパネルを、配管ユニット、トイレベースと共に現場へ搬入・組み立て施工するシステムで、工期の短縮化、現場施工の省力化を実現しました。
- 美しい仕上がりの高品質タイルパネル
フレーム、ボードから接着剤に至るまで、長年の研究と実績により独自に開発したINAXの高品質製品。水や薬品に強く、錆や変色の心配もありません。
- 優れた耐震性の自立式壁パネル
振動試験による応答倍数からみて、室の構造体は2000gal以上持ちこたえます。く体との固定は床のみで、層間変位の影

響を受けません。

- 作業環境を改善しメンテナンスも容易
組み立て工法だから養生期間がなく、作業現場も汚れません。施工はすべて床上でできるため、ビルでも一ヶ所ずつトイレの改造や取り替えが簡単にできます。さらに器具とパネルをはずすだけで配管のメンテナンス、補修もできます。

● 臭いを消し去る脱臭換気トイレ

トイレスペースにイヤな臭いが残ってはいはやすらぎ空間とはいえません。INAXではトイレ脱臭換気システムとして、脱臭口付大・小便器、換気口付配管ユニット、天井スリット換気口などをオプション設定。より爽やかなトイレ空間

をめざし、気になる臭いの問題に取り組みました。

● 高精度の安定した品質を誇る工場生産品

品質管理がいき届いた工場生産品のシステムトイレは、工場出荷時にも厳しいチェックを受け、各作業現場へ送り出されます。また、完成状態も事前にチェックできるなど、常に高精度の安定した品質が確保できます。

照会先 株式会社 INAX 名古屋支店
高橋
TEL 052-201-1724

(社)新日本建築家協会東海支部愛知部会機関誌ARCHITECTを

貴社の情報の場としてご利用下さい。

- ・貴社のイメージ広告として
- ・新製品の発表の場として
- ・営業所の移転、新設のご案内として
- ・設計営業担当者のあいさつの場として
- ・建築家とメーカーとの対話の場として

他に月極定期広告、単発PR広告も募集
しています。ご希望の方はJIA事務局まで

編集後記

●去る5月のARCHITECTインタビューで登場した海部俊樹さんが総理大臣に就任した。いろいろな評価はあるようだが、前首相宇野さんのすべり出しと違って、国民の信頼も徐々に回復しつつあるようである。とりわけ愛知選出の宰相として地元の期待は大きい。

●議員会館へ訪ねた折、ちょうど海部俊樹さんと、エレベーターでいっしょになった。あいさつもそこそこに「リクルートで自民党は大変ですね」と鋤納さんが声をかけると、海部さんはにっこり微笑みを浮かべて「この際、こうなる人は全部早くこうなってもらいたいものです。」と手首に鎖をかける格好をして答えた。

●インタビューでは「建築家の職能」の理解を得るのには非常に苦勞した。いくら話してもわかってもらえないという感じをうけた。海部さんの立場は政治家たるもの個別の利益のためには動かないというのが、まずあるべき政治倫理であり、建築家の職業を政治の枠の中で保障するということは、どうしても理解できな

かったようである。建築家の創造の自由、芸術行為、これこそ政治家の守るべきものという理解である。また、「建築家」と「一級建築士」をわけて考える考え方も海部さんには納得のいかないものであったようである。苦勞して一級建築士の資格を取得したのである。その一級建築士が「建築家」を自称すれば、すべて「建築家」ではないのか、という認識が海部さんにはあった。海部さんは、自分の秘書が勉強して「一級建築士」の資格をとり、それを祝って自分の祖父の家の設計を依頼した、と繰り返し語ってくれた。建築家の考える「一級建築士」と違う値打ちがそこにはあった。

●一級建築士の数が多くなったため、建築士制度を軽く思っている建築家が多い。しかし、海部さんの認識では一級建築士はたいしたものである。国家で定める建築技術者の最高の資格である以上、そうであっておかしくない。そこで筆者も「建築家の職能」をいう場合、この建築士制度を基軸にして社会に訴える方法を考えるのが有効ではないか、とふと思ったものである。

●海部さんは一時間の予定時間をオーバーして、秘書が紙片をもってきて次の

お客さんが来ていると何度も告げるのにもかかわらず、『建築士』と『建築家』の違いについて、今後のために教えてもらいたい「建築家は何を政治に求めているのか教えてほしい」と逆にノートをもち出して、インタビューに応ずるのではなく質問者になったの対応となった。文部大臣経験者として文化行政に対する情熱と謙虚さに、われわれは深い敬意をもった。

●その海部さんが、いまや日本の宰相である。日本の政治の改革と同時に、建築家の職能の問題も視野に入れて、新しい展望を拓いてもらいたいと願うこと切である。

ARCHITECT

第12号

発行日 1989・9・1 (毎月1回発行)

定価 380円

発行所 社団法人 新日本建築家協会
東海支部愛知部会

発行責任者 栢本良三

編集責任者 森 缸一

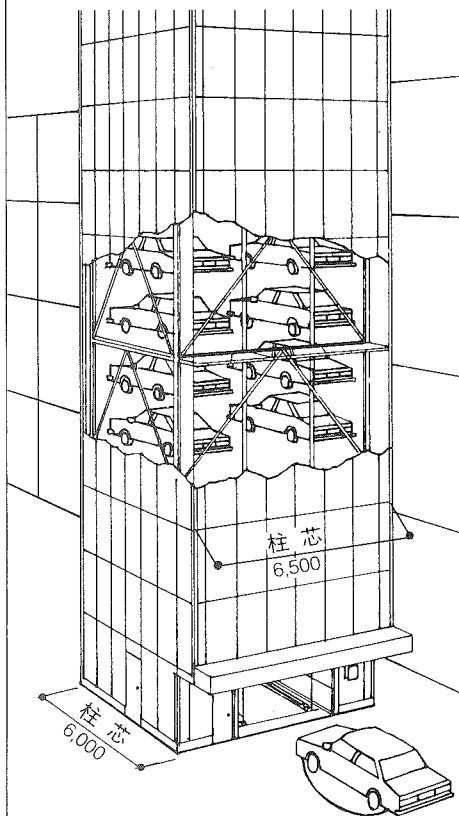
編集 愛知部会ブリテン委員会
建築ジャーナル

名古屋市中区栄四丁目3番26号

昭和ビル5階

TEL (052)263-4636 FAX 251-8495

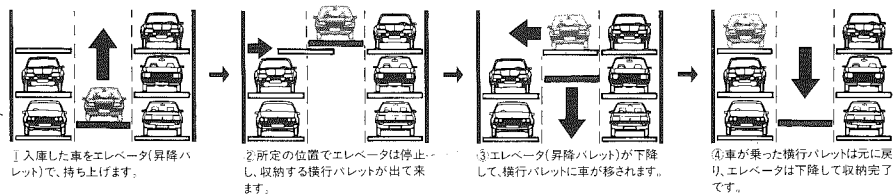
21世紀の駐車システム—パズルタワー—



パズルタワーはタチカワの最新駐車システム
画期的なエレベーター方式と比類のないフォークによる
連両受渡し機構の採用により時間の壁を破りました。

- ハイスピード…高速運転により、最大出庫待ち時間59秒
入庫時:60~90m/min 出庫時:94m/min
入庫と出庫の連続運転が可能です
- 低ランニングコスト…契約電力15Kw、電気料金4~5万円/月
- 静粛運転…騒音は従来比15db減少、振動は従来比 $\frac{1}{10}$ 以下となり、
深夜運転、ビル組込みが可能です
※上記はターン装置内蔵型、32台収容の数値です

((パズルタワー自慢の仕組み))



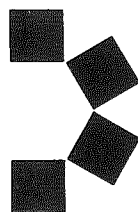
●資料及びお問合せ

立川ブラインド工業株式会社

名古屋支店

〒451 名古屋市西区児玉3丁目四番四号

TEL 052(532)0181



総合タイルメーカー

Kamiyama

ヒューマニティがベースです。

kamiyamaのコーポレートマークは、人間と技術と企業と製品とが一体になって、力を合わせていく“和進(調和精神)”の象徴です。また広がる未来への可能性と人の成長プロセスとに大切な環境要素として、コーポレートカラーをブルーに選定。次世紀への大いなる情熱をこのマークに込めてkamiyamaは歴史の重さと未来への新鮮な視点を融合させた、真に快適な《まちづくり》に推進してまいります。

上山製陶株式会社

本 社 工 場 岐阜県多治見市上山町1丁目8番地 TEL(0572)大代表22-8111 千507
FAX(0572)22-8119
名古屋営業所 名古屋市千種区今池2丁目1-33 TEL(052)731-0023-2152 千464
FAX(052)731-7145